

① 「カメラの基礎知識と模型撮影の工夫」

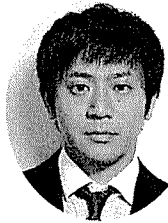
日常の治療や技工作業において、経過観察や歯の色調伝達、製作ステップなどを写真に記録する場面は、大変多いのではないのでしょうか。歯科医療の現場での写真撮影は、一眼レフカメラにマクロレンズを装着しての撮影手法が一般的です。しかし日常生活で多く使用されているインスタントカメラや、コンパクトデジタルカメラといった、シャッターのスイッチを押すだけでよかったものとは違い、設定や機能を理解し、駆使しなければ撮影が困難な場合があります。動く患者の撮影、納品直前の補綴物撮影など、条件により自分の理想とする写真撮影とは、ほど遠くなってしまいます。

そこで、少しでもカメラの機能、特徴を理解することが、理想的な写真撮影や撮影時間の短縮、失敗を減らす事につながると考えています。

今回の発表では、カメラの基礎知識と私自身が普段行っている撮影の様子、工夫をしている点などを紹介していきたいと思えます。

【講師略歴】 日下 雅暁 (ひのしたまさあき)

2001年 茨城歯科専門学校 卒業 2001年 (有) アインズ 入社
2003年 マスターセラミストスクール 卒業 2003年 (有) KNデンタルラボラトリー 入社



② 「そこにあるべき姿を考える

～歯型彫刻から学ぶ口腔内に調和した歯冠形態～

歯科技工とは、口腔内の失われた所に適切な材料を選択し、そこにあるべき姿をそこに再現することである。

そのためにはさまざまな知識と技術と経験が必要であるが、まずベースとして歯牙の形態を知る事は大変重要であり、必要不可欠であると考えている。

歯牙形態覚える一つの方法として、歯型彫刻をする事が非常に有効なトレーニングであると私は感じている。天然歯をじっくり観察し、特徴を捉える力を養い、目で見ただものを実際に形にして再現することで、体で形態を覚えることが出来る。また一歯のみの模刻以外にも、反対側カービングやブロックカービング(歯列を彫り出すもの)などの応用練習もあるが、それらにおいては単に形態を覚えるだけではなく、ワックスアップや築盛などの歯冠回復作業や形態修正、また歯列全体をまとめる力を養うことができると思う。そしてこれらを反復して行うことで指先のトレーニングにもなり、臨床においてのスキルアップも期待出来ると思っている。

こういった意味でも「歯型彫刻」は歯科技工士にとって非常に大切なトレーニングであり、基礎力となるものではないであろうか。

今回は、私が歯形彫刻を通して感じてきたことを、お伝えしたい。

【講師略歴】 石井 ひとみ (いしいひとみ)

2012年 3月 新大阪歯科技工士専門学校 卒業
2012年 7月 第13回歯型彫刻コンテスト「ほるほる」有資格者の部 最優秀賞受賞
2013年 3月 早稲田歯科技工トレーニングセンター 卒業
2013年 4月 (株) オーリアラ 入社 現在に至る



③ 「インプラント上部構造について」

ブローネマルクにより開発されたオッセオインテグレーションタイプのインプラントが臨床応用されてから約50年が経過しました。その間、色々なメーカーがインプラントを開発し、多くの患者の口腔内に埋入されてきました。長期予後の症例が報告され、インプラント治療から起こるトラブルの一つとしてインプラント周囲炎がトピックとしてあげられています。

多くの問題も露呈してきている今、私達、歯科技工士は、機能性、審美性に加え、清掃性にも配慮した上部構造を作製しなくてはなりません。

それを踏まえた形態をどう適正に与えるかで、長期予後に大きく影響する事が多くの研究や臨床上で分かってきています。しかし審美性を追求するあまり、清掃性の悪い形態となり周囲組織にトラブルを生じる症例も目にします。これは、歯科医師も歯科技工士もその患者に合った形態について考えを詰める事をしていない結果だと思われれます。

そこで、今考えられる適切な形態についてもう一度考えてみませんか?これからインプラント技工を始める方、今まであいまいに形態付与してきた方にとって少しでも参考になれば幸いです。

【講師略歴】 新城 友和 (しんじょうともかず)

2007年 東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校 卒業
2008年 マスターセラミストスクール 卒業
2008年 (有) グランツテクニカ
2011年 (株) フィールデンタルラボラトリー
2013年 医療法人社団 藍茜会 ブローネマルクオッセオインテグレーションセンター

スタディーグループ: WAVE/W-inc/MCS陶友会/Grass Hopper

④ 「異物感の解消と機能性向上を図った義歯の設計と製作」

歯科補綴治療を希望する患者さんは、齶蝕や欠損を有する口腔内に対して、審美性や機能性および生体親和性に優れた審美補綴治療に対する要望が高度化・多様化してきた。とくに、義歯に対する問題のなかには、義歯装着に対する異物感や発音に対する違和感さらにはインプラント治療による不安感などから、付加価値のある義歯が求められるようになってきた。

今回紹介する機能美デンチャーは、失われた口腔の形態回復と審美性の改善をコンセプトに開発されたシステムであり、義歯の異物感を軽減し、発音にも影響の少ない義歯設計となっている。そこで、ラボサイドからのアプローチについて、臨床例を用いて製作術式を解説する。

【講師略歴】 中村 八大 (なかむらはちだい)

1972年 東京都生まれ
1992年 新東京歯科技工士学校卒業 東京歯研入社 現在に至る

スタディーグループ: 遊学会 会員/機能美デンチャーインストラクター/ARC実習コース受講

